5 干拓・石橋編

八代市の文化財

八代平野の干拓地

干拓とは、干潟を堤防で囲って排水し、海底の肥沃な土地を農地として利用することです。八代平野の3分の2は、江戸時代から行われてきた干拓によって生まれた土地で、多くの人々の苦労と知恵によって築かれたことを忘れてはいけません。

国指定

干拓地を守るための水門
旧郡築新地甲号樋門

国指定重要文化財　郡築三番町

明治時代、郡築干拓のときに作られた水を流し出すための門です。古城弥二郎郡長の指揮のもと、明治33年から明治37年(1900～1904)にかけて作られました。切石造りのアーチ式10連樋門で、アーチの部分には赤レンガが使われています。現存する石造りの樋門としては、国内で最大規模のものです。

県指定

江戸時代の干拓に使われた水門
大鞘樋門群

県指定史跡　鏡町両出・千丁町古閑出

鏡町と千丁町の間を流れる大鞘川に三つの樋門があります。これは、文政2年(1819)の四百町新地に設けられたものです。潮流や川の流れに耐えるために石垣つくりで二重構造になっており、樋門を囲む石垣の一部に通常は城郭以外には使用されることのない巨石を用いています。人々は樋門の堅牢さに驚き、賞賛の意味を込めて「大鞘樋門」と呼ぶようになったと伝えられています。「大鞘名所(大鞘節)」の発祥地です。

大鞘名所（大鞘節）

鏡地区は、その約八割が干拓によって形成された土地で、幾度となく干拓が繰り返されてきました。その中でも文政四年(1821)の七百町新地の築造は最も大掛かりで、出稼ぎの人夫たちに過酷な労働を強いることになりました。「大鞘名所(大鞘節)」はその頃生まれた労働唄です。歌詞には、天草の阿村出身の娘「お菊さん」と、現場監督の「だいばどん(利兵衛)」のやるせない恋物語が織り込まれ、軽快なリズムに合わせた面白い囃子とともに踊りが繰り広げられます。この民謡はその後、八代平野一帯から天草や球磨地方にまで広がり、座敷唄として、特に酒の座には欠かせない民謡として歌われています。当時の作業の様子を模した所作は、戦前に完成したといわれています。

碇原子ども会おざや名所(市指定無形民俗文化財)

市指定

干拓に力を尽くした親子の墓
鹿子木量平と謙之助親子の墓

市指定史跡　鏡町両出

鹿子木量平は、野津手永の惣庄屋兼代官で、百町(文化2年)、四百町(文政2年)、七百町(文政4年)などの新地を完成させ、干拓事業に力を尽くしました。その子謙之助も父を助けて、工事を進めました。彼らの墓の脇には、量平を神様として祀った文政神社が作られました。

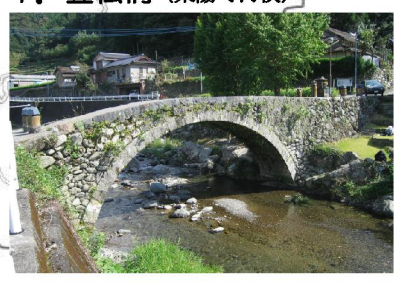
八代地方の石橋の分布図

八代地域の石橋群

八代には、江戸時代末期から大正初期に作られた石橋が42基残っており(県内最多)、そのうち11基が指定となっています。材料の石は、近くで採れる阿蘇山の噴火で流れた溶岩がかたまった凝灰岩を使っています。

ア．鹿路橋（東陽町河俣）

イ．笠松橋（東陽町河俣）



オ．鑑内橋（鏡町内田）

ウ．鍛冶屋上橋（東陽町北）

カ．赤松第一号眼鏡橋（二見赤松町）

エ．小崎眼鏡橋（坂本町中谷）

※ア～カは　市指定文化財

二見の石橋群

国道3号線と平行して南から北へ流れる二見川には、現在6つの眼鏡橋(新免・赤松第一号・大平・新大平・小藪・須田)が残されています。以前はこの他に君ヶ淵と堂園に石橋が架けられていました。これらの橋を結ぶ幅1.5m～2mほどの小路が、かつての薩摩街道です。これらの眼鏡橋は、いずれも江戸時代の嘉永2～6年(1849～53)頃に架けられたといわれています。

市指定

肥後の名石工の墓
岩永三五郎の墓

市指定史跡　鏡町芝口

岩永三五郎は、寛政5年(1793)野津に生まれたといわれ、肥後の名石工といわれ、特にめがね橋の築造にすぐれた技術を持っていました。その技術をかわれ、薩摩(鹿児島県)に招かれ、多くのめがね橋を作りました。鏡町に唯一つ残る鑑内橋も三五郎の作と伝えられています。

＊＊石橋を作った名人達＊＊
～種山石工～

東陽町は、江戸時代の末から大正時代初期まで全国に数多くのめがね橋を架けた石工たちの出身地です。当時の種山村(東陽町種山)が発祥地であったため、種山石工(肥後石工)と呼ばれました。

長崎奉行所の役人であった林七は、ヨーロッパの石橋作りの技術を修得し、武士の身分を捨て、種山に身を隠し、めがね橋作りに情熱をささげました。

有名な橋本勘五郎は、林七の孫で、鏡町に墓が残る岩永三五郎の弟子でもありました。勘五郎は、美里町の霊台橋や山都町の通潤橋など熊本県を代表する石橋や東京の日本橋なども手がけました。

八代市教育研究所発行「<小学校６年生>史跡めぐりやつしろ」をもとに作成しました。　八代市教育委員会　文化課